

タイトル

壁。人と猫。

あらすじと概要

新しい職場で出会った猫との不思議な時間と新しい日常。
例のショートネタの勝手にノベライズ版です。

本文

おばあちゃんは、「えんがわ」にすわるのが好きだった。
空を見たり、土を見たりしてた。
お母さんは「おばあちゃん、なにしてるのかな？」と言ってたけど、なんでわからないんだろう、とおもった。
すわってるのに。

ぼくはそれを見るのが好きだった。
ぼくが見ていると、おばあちゃんはぼくをよんで、いろいろなはなしをしてくれた。

あるとき、へいの上にねこがいた。
おばあちゃんは、そのねこをへんななまえでよんだ。
ぼくはふしぎだったから、おばあちゃんにきいた。

「なんでそんななまえなの？」

母が、階段から落ちて足を折った。
母は父が2年前に他界してから、ずっとひとりで暮らしていた。
母親には悪いが、骨折程度で済んでよかったし、かたくなに「私と一緒に住まなくていいから」と言っていた母親もさすがに拒むことはなくなった。
まだ入院中だが、母親と暮らす良いきっかけをもらったことになる。

引っ越し、職場も変えた。
これに対して妻は文句を言わなかった。

「実家に引っ越し？」

「どう思う？」

「めっちゃいいわ」

「ほんと？結構、大変だと思うけど」

「大丈夫よー、なんとかなるわ。むしろちょうどいいわよ。あそこの公園の子たち、明日香に意地悪するのよ。ママたちもちょっとアレな人たちだったし。忍くんの実家でしょ？家賃ゼロとか最高」

こう話したのが昨日だ。
明るいのはいいが、妻の言葉には遠慮がない。

「保育所か幼稚園は探す？」

「んー、まあそれもそうだけど、まずは私が仕事探さないかね。お義母さんの方が大変だから、そっちが落ち着いてからだけどね」

「そうだな。ありがとう。じゃあ、とりあえず仕事行ってくる」

「はい、行ってらっしゃい。明日香、パパ行くよ」

「はいー」

4歳の娘が玄関に来た。

「パパ、行ってらっしゃい」

ここ最近の筋トレブームの影響か、フィットネストレーナーとして就職先には困らなかった。

新たな住居から駅まで歩いて5分。

電車に乗って15分。

笹塚の駅で電車を降りて、歩いて5分で仕事場に着く。

大きなビルのワンフロアがジムになっている。

マシン、フリーウェイト、スタジオ、シャワールームなど、ひとつおき揃っている。

利用者は老若男女さまざまで、初級者から上級者までいる。

再就職から1週間。

この店舗での業務にも大方慣れてきた。

元々同じ業界で仕事をしていたので、新しく覚えることは少ないが、利用者への対応はいつまで経っても疲れる。

(『好きなことを仕事にするな』っていうのはこういうことなのかなあ)

昼休み。

ジムで着ていたウェアの上から1枚羽織って、外に出る。

ジムが入るビルから1分も歩くと、コンビニがある。

そこに入り、サラダチキン、おにぎり2個、サラダを買って出た。

ビルには公開空地があり、ベンチがいくつか置かれている。

その中のひとつに腰を下ろした。
ガサガサとレジ袋を鳴らしていると、にゃあ、と聞こえた。

(猫か)

どこで鳴いているのだろう。
見渡すが、猫の姿はない。

(そうか、そう簡単に姿は見せないんだな)

なぜかニヤついてしまった。
サラダチキンを手に取り、ひとくちかじる。
また、にゃあ、と聞こえた。
遠くではない。

にゃあ。

自分が座るベンチの下を覗くと、そこにいた。
黒と白のブチ猫だ。
黒の方がやや多い。

「おや、また来たんだね、その子」

顔を上げると、清掃員の服を着た中年の女性が立っていた。

「また？ ずっといるわけじゃないんですか？」
「最近見るようになった子だからね。いたりいなくなったりよ」
「へー」

このビルの清掃員だろうか。

「この子、去勢終わってるし、トイレの場所もわかってるから、ご飯あげるのは大丈夫だよ。置き餌
じゃなけりゃね」
「そうなんですか」
「食べるかどうかはわからないけどね」

にやりと笑って、女性は立ち去った。

再び、ベンチに座ったまま、下をのぞき込む。
そっぽを向いていたが、こちらを見て、またそっぽを向いた。

いるのはわかっているが、あえて相手にしない。
新入りのあいさつを待っている先輩のようにも見える。

サラダチキンを8割ほど食べ、残りを猫に差し出してみた。
猫は動かない。

(ま、そうだろうな)

脳裏に、缶詰で猫を呼ぶ祖母の姿が浮かぶ。

(ばあちゃん、どうやって手懐けてたんだろ)

祖母は、可愛らしい猫を、妙な名前で呼んでいた。

(そうだった、変な名前だったな)

再び、猫にサラダチキンの残りを差し出してみた。

「ゴスケー、食うかー？」

ゴスケとの出会いから1ヶ月経った。
ゴスケは昼飯時以外、見かけることはなかった。
彼の好物はノンオイルのシーチキン缶。
高級品だが一度食べさせたら、以降はこれより安いものは口をつけなくなったので、仕方なく毎日買っている。

俺の昼休みは、ゴスケとのランチミーティングだった。

「うちのカミさんがさー、税理士事務所の就職決まったんだよ。早いよなあ」

ゴスケがベンチにのぼって腹を見せてきた。

「やっぱ俺も手堅い資格とつときゃよかったなー」

腹を撫でる。

「ゴスケはどう思う？」

にゃあ。

別店舗への転勤が決まって1か月。
笹塚店での最後の出勤は何事もなく終わった。

着替えを済ませ、近くのインドカレー店に入った。
遅番の勤務の時は、決まってここで夕食を食べて帰った。
馴染みの店と言っていいだろう。

この店に来ることもなくなる。
寂しくなる。
ここのマンゴーラッシーは絶品だった。
転勤先は初台。この笹塚から電車で数分だ。

ゴスケに会うのも、今日が最後だったのかもしれない。
そんな寂しさから、店主にいろいろと打ち明けた。
「それ転勤って言うのかよ」と言っていた店主だが、彼が教えてくれたインド映画のタイトルが、心に残った。

「きつとうまくいく」
(そうだよな。きつと、うまくいくよな。ゴスケと会えなくても)

新しい店舗での勤務が始まった。
別段、覚えることが増えるわけじゃない。

あっという間に昼休憩の時間になった。
別に、大変じゃない。
ただ、毎日昼飯を一緒に食べた仲間が恋しい。

昼休みの1時間をまるまる使って、笹塚店のあるビルまで足を運んだ。
ゴスケとのランチミーティングが恋しくて、仕方なかった。

ビルの正面のコンビニでゴスケが好きなノンオイルシーチキンを買った。
もしかしたら、この姿も見られているかもしれない。

見てくれているかもしれない。

いつも座っていた、あのベンチの前に立つ。
はやる気持ちを抑えて、缶を開ける。

「ゴスケー、いるかー？」

猫の姿はないし、声も聞こえない。

「ゴスケー、いないのかー？」

ふと後ろに人の気配があつて、振り返る。

中年男性が立っていた。

黒いキャップ、黒いセーターに薄いブルーのジーンズにスニーカー。パチンコ店に行くためだけに
出てきたような服装だ。

ジッとこちらを見ている。

何も言わずに、ジッと。

「あ、すみません」

絡まれても嫌なので、とりあえず謝った。

男は何も言わず、ジッと見ている。

男を気にしながら、シーチキン缶を片手に、周りを見渡す。

「あああえわわさん」

男が急に声を出した。

驚いたが、あまり直視しない方がいい。

少し、わざとらしくないように距離を取る。

男が再び声を出した。

「はあしえがわあしやん」

(！？長谷川さんって言ったのか？名前を、呼ばれた……なんで俺の名前を？知り合い？)

改めて男の顔を見た。

鼻先が黒く、その鼻の両脇から、長くまっすぐで固そうなひげが、左右に3本ずつ伸びていた。

「に一んげんにい、なあれましたっ」

「ゴスケ？」

目の前の、中年の男が、ゴスケ。
突きつけられた異常な事態を、なぜかすんなり受け入れることができた。

「そおおれ」

中年の男のゴスケが、俺の手を指さして言う。

「え？これ？」

「そおおれ、くうださい」

「あー！ごめん！食べるのね！じゃ、じゃあ食おうか」

翌日の昼休み、笹塚店の前のベンチに行った。
いつものシーチキン缶を持って。

「ゴスケー、いるかー？」

にゃあ。
声の方を向くと、白と黒のブチ猫がいた。

(よかった。猫だ)

昼食後、ビルの前のベンチで空を見上げる。
何度か通ってわかったことだが、ゴスケが人間の姿で出てくるのは決まって水曜日だった。
そして今日は中年の男性だ。
体は中年男性だが、食べる量は猫のそれだった。
ゴスケは満腹になって気持ちいいのか、今は嬉しそうに手の甲をペロペロと舐めている。

「うわー、すげえきたねえなー」

ビィィーッ！

クラクションが鳴り、ゴスケが弾かれたようにそちらを向く。

「大丈夫だぞー、ゴスケ。なんもないぞー。ペロしまい忘れてるぞ」

遅番勤務の夜、店舗から駅への道中、いやな声が聞こえてきた。

おええええ

吐いている。

すぐに道端にうづくまる人影が見えた。

(駅のホームにもいるんだろうな、飲みすぎて、ぐったりベンチに座るおっさん)

明日の木曜日は祝日になっている。

休みの前の日の晩の光景としては、珍しくない。

珍しくないが、いやなものはいやだ。

おええええ

(こっちのおっさんも、いい年こいて、自分の飲める量もわかんないかね)

すぐそばを通らなければならないのがいやだが、わざわざ車道を横切って反対側の歩道に行くの
もしゃくにさわる。

見たくもないのに、横目で見ながら通り過ぎる。

おええええにや

「ゴスケ!？」

よく吐くとは言え、紛らわしい吐き方するなよ。

笹塚店の前のベンチ。

昼食が終わり、午後の始業のタイムリミットまであと10分。

「はあせがわしゃん」

満腹になったらしいゴスケが声をかけてきた。

「なんだよ」

「ひーざにのっても、いいですか？」

「勘弁してくれよ、疲れてんだよ」

「いいじゃにやいですか」

「猫のときに来いよ。なんでおじさんのときに来るんだよ」

「さむいし、ちょうどいいとおもいにやすよ」

「いいよ来なくて。顔近づけんなよ……うわ! くっせえ!」

猫は肉食なので口がくさいらしい。

* * * * *

昼飯を終えて、ベンチの上に競馬新聞を広げた。
年に2回だけ、馬券を買うレースがある。

「にゃ」

ゴスケは声を上げて、競馬新聞の上に手を置いた。
人の手だが、猫の前足のような形にしたいようで、指を曲げている。

「ゴスケ、ちょっと、どけてくれ、読んでるから」

ゴスケは手を下ろした。
さて、どの馬に。
考え始めると、またゴスケは「にゃ」と新聞の上に手を置いた。

「たのむよ、今回のレースは」

言いかけて、止まった。
ゴスケの手は、さっきと同じ場所にある。
競馬新聞の紙面の、馬の名前が並ぶ表の上に。

「お前、当てようとしてんのか？」

動物には人間にはない力があるらしい。
地震を事前に察知する鳥。
百キロ以上離れた新居にいる飼い主に自力でたどり着く犬。
特に猫は、ある種、霊的な力までであると言われる。

「よし、わかった。頼む、ゴスケ」

ゴスケが俺の目を見る。

「今回のレース、どの馬が来る？」

俺の意図が伝わったらしく、ゴスケはみたび、「にゃ」と手を、紙面の表の上に置いた。
手の甲を上に向けて、成人男性のサイズの握った拳が、表の上に乗る。
表のほとんどが手で隠れた。

「いやどれかわかんねえよ」

日曜日、ゴスケの手が触れるところを適当に狙って馬券を買ったら2万3千円のプラスになった。自分には高いビールを、ゴスケには特別高い缶詰をその日のうちに買った。

(あいつのおかげだからな。明日これで礼を言おう。でもこれで、これ以外食べなくなったらどうしよう)

月曜日の昼。
電車を降りて、初台の駅の改札を出る。
もう昼休みが終わる時間だ。
今日はゴスケに会えなかった。

(あの清掃のおばさんが言ってた、いたりいなかったりの、いない日なのかな)

ゴスケへの礼にと持って行った缶詰を、そのまま持って帰ってきた。

「パパー」

明日香の声が聞こえた。
見渡すと、妻と娘、ふたりがこちらに歩いてくるのが見えた。

「あれ？どうしたの？」
「子ども服を買いに来たついでにね、会えるかもーと思って、ちょっと寄ってみた」
「これ！」

明日香が手の中の丸いものを見せて割って入る。

「お、ガチャガチャか？何にしたの？」
「ねこだよー。みせるね」

開けようとしてうまく行かず、明日香は丸いケースを落としてしまった。

「このへんに良い店あるの？子ども服」
「そう。私も知らなかったんだけどね……！？明日香！ダメ！」

一瞬の気の緩み。
明日香が転がるケースを追って、車道に出ようとしている。
トラックが迫る。明日香はそれに気づかない。
あと2歩も進めば、ぶつかる。

ケースを追う明日香の前に、一匹の猫が躍り出た。

(ゴスケ！)

これ以上ないくらい牙をむき、娘を威嚇する。
怯えた娘は立ち止まった。
トラックのスピードは落ちない。
猫は車道から避難するが、間に合わなかった。
小さな体が、宙を舞う。

ぐったりと動かない猫の体を抱いた。
体は温かいが、動かない。
だんだんと虚ろになっていく思考の中で、子どものときの記憶がよみがえる。

記憶のなか、庭の塀に向かって、縁側に座る祖母が声をかけた。

「ほら、ゴスケ、おいで」

塀の上の猫は、反応しない。

「どした？ゴスケ、ご飯食べないか？」

祖母が手の中のキャットフードの缶詰を見せるように前に出した。
猫が塀から身軽に飛び降りた。

「なんでそんな名前なの？」

祖母がこちらを見た。

「んー？変な名前だと思ったの？」

意味がわからず、黙っていると祖母が続けた。

「猫ってのはね、自由気ままに生きてるようで、周りをよおしく見てるんだよ。人を助けてくれることだってある」

猫を見ると、猫もこちらを見ていた。

「だからね、護り、助けるって書いて、護助なの。あとで漢字で教えてやるね」

「ふーん」

「忍も大きくなったら、そういう人間になりなさい」

「うん」

* * * * *

日曜日、外は晴れ。

リビングのソファに座って、ぼんやりと宙を見ていた。

(ばあちゃんがつけた名前、いい名前だったんだな)

明日香は床で人形遊びをしている。

「ゴスケ」

つい口に出ていた。

明日香がこちらを見て言う。

「ん？なに？」

「なんでもない。ゴスケに言ったんだ」

「ふーん」

明日香は遊びを再開した。

「ありがとな、ゴスケ」

目をつぶると、初めて出会ったころのゴスケの姿が浮かんだ。

黒がやや多い、白と黒のブチ。

目を開けて、ソファの隣を見る。

「今度は俺に助けさせてくれな」

にゃあ。

後ろ足のギプスをうっとうしそうに見ていたゴスケが、返事をした。

おわり